

# 分散会 1

司会者 尾崎 真一  
記録者 今永 泰生  
会場責任者 小笠原貴久

## 北海道占冠村公民館

### <公民館地域連携活性化事業>

北海道の夕張山脈と日高山脈の間にある占冠村公民館の事例である。

一つ目として、地域再発見事業の事例を紹介する。村木であるカエデの木を活用したメープルシロップ製造を企画したり、商工会青年部と共に地域産品を住民に売り込んでいこうと DEER PARTY を開催したりしている。

これらの活動は地域産業を住民が支える体制づくりへとつながっていった。

二つ目として、公民館と大学が連携を組んで行った事例を紹介する。小さな地域で育つ子どもたちの教育環境の改善を図るために、子どもたちと高齢者を巻き込んだ事業を実施している。三つ目として、地域づくりセミナーの事例を紹介する。このセミナーは住民有志と公民館が地域の将来を考えていこうと、エネルギーを題材としながら実施したものである。



竹内 清孝 氏

## NPO 法人 教育支援協会

### <ふくしまキッズ>

「ふくしまキッズ」の事業は、2011年の東日本大震災及びその後の原発事故が原因で、屋外での活動や外遊びが制限された環境下にいた福島県の子どもたちを対象に、2011年夏の北海道プログラムを皮切りに開始された。これまで5年の間で、京都や愛媛、岐阜などの全国13の受け

入れ地において、合計4,641人の子どもがこの事業に参加している。受け入れ地のNPOや自治体の協力の下で、ホームステイ、ファームステイ、現地の子どもたちとの文化交流、人との交流を行ってきた。生まれ育った土地外でのこのような経験を通して、逆に子どもたちが福島への「郷土愛」を育てていったことが調査結果より明らかとなっている。人とつながる、地域と共に育つ経験が、場所を選ばずして子どもの自尊心の成長に寄与することを明らかにした事業の一つである。



鈴木 菜津美 氏

## 松山市立久米小学校

### <5年生と地域による古代米づくりと販売>

松山市立久米小学校の5年生による総合的な学習の時間「とっ久米タイム」において、地域と古代米づくりの活動を行っている。もみまきから始まり、田植え、生育調査、稲刈りと、地域の方に教えていただきながら古代米づくりの体験をしている。今はあまりつくられなくなっている、古代米の中でも生命力の強い「赤米」づくりに挑戦している。赤米づくりをするだけでなく、

収穫した赤米を文化祭で販売をしたり、お世話になった地域の方を招いて、感謝祭を開いたりもしている。石包丁や鎌など、昔ながらの方法を用いて収穫することで、機械化の便利さや昔の人の工夫について子どもたちは実感することができた。また、赤米販売を通して、販売することの難しさ、人との関わりの大切さを学ぶなど、キャリア教育の視点も取り入れた総合的な活動となっている。



谷村 晴香 氏

## <全体協議フリートーク>（自己紹介後）

- ・なぜ震災をきっかけに仕事を辞めて、財団に参加しようと思ったのか。
- （鈴木）仕事にも慣れ、物足りなさを感じていた時期に震災が起きた。震災時は旅行に行くため羽田空港にいたが、私服であるという理由で手伝いに入ることを許されなかった。手伝うべき立場にいたのに手伝うことができなかった。非常時だからこそ、助け合わなければならないのに、それができなかった経験から、このような活動にしっかりと腰を据えて取り組みたいと考えた。
- ・バイオマスによる発電の計画はあるのか。
- （竹内）林業者が使っている端材が大量に出る。ペレットではなく薪として使用している。石油ストーブの方が楽だが、村から補助を得て薪ストーブを使っている。最近の薪ストーブは熱効率もよい。スキー場のロッジなどで薪ストーブを利用することで、地域の人に広めている。
- ・占冠村に公民館はいくつあるのか
- （竹内）分館はあるが機能していない。現在は教員退職者が担当しているが来年度は人手がない。
- ・メープルシロップの商品化はしないのか。 →（竹内）商品化はまだであり、現在調査中である。
- ・木とバイオマスの循環がうまくいけば面白い。人も集まるかもしれない。
- ・公民館にコーディネーターはいるのか。
- （谷村）久米校区の公民館には2人のコーディネーターがいる。毎週土曜日に大学生たちも呼んで活動している。
- ・学校の先生が地域とのつながりの大切さを感じているのは何か研修等を行っているのか。
- （谷村）地域からのアピールもある。学校は学校としての計画があるので、その計画の中でできることを取捨選択している。地域のよさを学ぶこと、地域に出ていくこと、地域にはどのような人材がいるのか知ることが大切であるという共通理解を教員間でもっている。
- ・大規模校だからこそ地域の協力が必要である。地域と学校との信頼関係があるように感じた。
- ・久米地区はこれまでの公民館主事が伝統を作り上げてきたという面もある。
- （谷村）教員は取り組みたいことは多いが、時間的にも能力的にも制約がある。だからこそ、コーディネーターの存在は大きいように感じる。
- ・計画は前年度からコーディネーターと相談して決めているのか。
- （谷村）前年度から決まっているものもあるが全てではない。柔軟に対応してもらっている。
- ・活動の成果を保護者や地域の人に知ってほしいと感じる。親へどのように働きかけているのか。
- （鈴木）ふくしまキッズでは、私たちが果たす責任と、親が果たす責任を分かち合うことを重要視している。活動参加費は一人一律3万円（往復の交通費分）であり、宿泊費などは財団が出している。参加費が無料の団体が数多くあるが、その場合、親の意識が低下する傾向にある。活動費を徴収するのは親の意識を下げないためである。親子で説明会にも必ず参加してもらうようにしている。活動前後は受け入れ先に対して、必ず手紙・礼状を書くようにしている。親の意識も活動を通して変わってくる。しかし、理解がある一方、「自尊感情や郷土愛」といった目には見えない子どもの変化に気付きにくい傾向にある。逆に「返事をする。食べ物を残さない」といった目に見えるものに注目する。親がその価値に気付くのは、今すぐではないのかもしれない。
- ・ふくしまキッズが終わり、来年度以降の活動はどうするのか。
- （鈴木）この先は交流をしたいと考える地域と連携を組み合わせながら活動を続ける。福島県はこれまでは県外に保養に行くという考えには否定的であった（県が県外へ出るところを簡単に了承してしまうため）。しかし、他県と交流をするからこそ、郷土愛が育ち、結果として県に帰ってくるということに気付き始めた。これからはそのようなスタイルにシフトしていく予定である。

- ・愛媛を知ることによって福島について知る。他から自分を知ることにつながっていくのだろう。
- (鈴木) 例えば、岐阜の子どもたちと議論をした時、地域自慢として福島の子は「学校には素敵な先生がたくさんいる」と答える子が多くいた。これは福島の多くの先生が、震災時に子どもを守ろうとしたからであろう。岐阜の子どもたちはそこから気付き、福島の子はこのことを誇りに思うことができる。ちなみに福島県内の学校はまだ仮設住宅が運動場に残ったままである。
- ・エネルギーを題材にしたセミナーについて、誰が企画を担当したのか。
- (竹内) 住民の人が企画した。村には地元の人だけでなく道外から来た I ターンの人もある。この I ターンの人たちがエネルギーのことについて考えてくれ、啓発してくれている。
- ・今、私の地域は、縦は幼小中、横は公民館まで含めて関わりを深めている。関係性・連続性を大切にしながら活動を進めていきたい。また、外から来た人が活動を広めてくれるので、交流人口の大切さを感じている。これからは、町・村おこし、人づくりではなく、人結び、ノット（結び目）ワークが大切であると感じる。リーダーシップも大切だが、フォロアーシップも大切にしたい。夢のある人でしか夢のある町をつくれない。夢のある町にしか、夢のある子どもは育たない。
- ・メープルシロップ作りについて、反対意見が多かったらしいが諦めずに取り組まれたのはなぜか。
- (竹内) 反対する部署がほとんどであったが、樹液を持って役場を歩くことによって注目を浴びることができた。相手から寄ってくるように手立てを講じることが大切であると感じた。
- ・ふくしまキッズの活動資金は寄付金によるものであるのか。
- (鈴木) 各地で行っている夢基金によって活動している。最低限の補償はあるが、活動が豪華すぎると子どもは育たない。普段の生活を他の場所ですするという発想に立っている。例えば、京都のプログラムは自給自足で活動している NPO 法人が担当している。子どもたちが民宿 1 件を与えられて、畑で野菜収穫、ニワトリをしめる体験、山羊の乳しぼりなどを行う。これらの活動は全ての子どもたちが必要とする価値が含まれていると考える。
- ・小学校側として、地域の人と関わる時どのようなことを大切にしているか。
- (谷村) 地域と関わることで、本物に触れたり、座学では学べないことを学べたりする。そして、学びが生きたものになる、教師が子どもと地域とのコーディネーターになることが理想である。
- ・お米を作ること、地域と関わることは目的ではなく、あくまでも手段である。手段と目的とを明確にしながら、目的について考えていく必要がある。
- (谷村) 体験→学習→体験…。このような繰り返しが大切である。久米小では手段はちがっても各学年で地域と関わっている。子どもは関わり方を学んだり、関わりから学んだりしている。
- ・NPO 法人おのみちの活動の内容を教えてください。
- (おのみち) ほぼ大学生で構成されている。NPO 法人の取りまとめは尾道市議会議員である。大学生に様々な力を育ててほしいという思いから、研修会を企画してくださる。全員が尾道に住んでいるわけではない。100 キロウォークは尾道市だけでなく、全国でも実践されている。
- ・久米の里山は地域の中にあるのか。また管理は誰がしているのか。
- (谷村) 草引きなどの管理は地域の人たちが行っている。元々は耕作放棄地であり、そこを子どもたちの活動場をして有効活用していった。例えば 4 年生は夏休みに里山でキャンプをしている。
- ・地域と学校の間には辛い関わりもある。このような関わりは学校との信頼関係が築かれていないとできない。公民館や防犯協会も交えての小中連絡協議会を月に 1 回行い、辛いことも学校には言ってもらえるようにしている。例えば、教室に入らない生徒を支援するのも地域としての仕事ではないか。不登校の生徒には会社の一室を準備して、一人のために授業をしている。信頼関係を築くためには腹を割って話し、汗をかいて課題を解決していくことが必要である。